

吉野川第一期改修百周年に向けて⑤

～絵図から読み解く吉野川河口域の新田開発～

松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館 学芸員 菅野 将史

はじめに -連載を担当するに当たって-

「吉野川歴史探訪」新連載のリレー5番目の執筆は、菅野が担当させていただきます。私は1987（昭和62）年に群馬県で生まれ、幼少期から約20年間は埼玉県で育ちました。親戚も関東・東北・北海道の出身者ばかりで、実のところ徳島県に縁もゆかりもなく、2015（平成27）年に松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館（以下、資料館。）に就職するまで、徳島県を訪れたこともありませんでした。埼玉県に住んでいた頃は、日本の三大暴れ川に数えられる「坂東太郎」の利根川、地元・埼玉県を流れる荒川などに馴染みがありましたが、徳島県をはじめて訪れたときに見た吉野川や旧吉野川河口の水量の多さに驚きを覚えたことを、今でも忘れません。

また、大学時代に江戸時代の地域史・村落史を中心に学ぶ上で古文書や古絵図などを解読することの魅力を知り、地域や寺社に残されている史料の整理・調査に携わる機会にも恵まれたことをきっかけに、博物館学芸員を目指すようになりました。学生時代の主な研究テーマが江戸時代の舟運・河川流通であったこともあり、「吉野川歴史探訪」の執筆の話をいただいたときは「川」とは何かと縁があるなと感じました。

ところで、私の職場がある松茂町の大部分は、江戸時代の新田開発によって陸地化されました。トラックや建設機械などがまったくない時代の先人たちは、何のために吉野川河口を開発していったのでしょうか。今回は、資料館が所蔵する板野郡豊岡新田に関係する史料をもとに、江戸時代後期に開発された豊岡新田と、その開発者である坂東茂兵衛家が吉野川の水害や自然災害とたたかいながら土地を開いていった歴史を探訪していきます。



写真1 現在の松茂町豊岡地区



写真2 豊岡神社（江戸時代末期には新田会所が近くにあったとされる）

1. 近世初期の吉野川河口の姿

松茂町は板野郡の東端に位置し、町の東側は紀伊水道に面し旧吉野川、今切川河口部に形成されています。古代には吉野川河口のラグーン（潟湖）であり、室町時代以降に徐々に陸地化していったと考えられています。近世初頭には長岸村・広島浦・中喜来浦の三カ村浦がありましたが、それ以東は吉野川今切口（現：今切川）の別宮浦長原を除いてラグーンのままであったと伝わっています。

国文学研究資料館が所蔵する蜂須賀家文書に、図1「御両国図」(1665年[寛文5年]頃作成)、図2「阿波御国図」(1697[元禄10]年頃作成、1802[享和2]年補訂)という2つの絵図が遺っています。どちらも江戸時代初期の徳島藩領の村浦や石高(村浦の標準的な玄米収穫量)などを描いた絵図です。

図1の中央部(赤点線内)「への字」で描かれている島の楕円の中には「廿六石余 広島浦」と、そこから北側の島には「百三十七石余 中喜来村(正しくは浦)」、「九十六石余 長岸村」と書かれているのがわかります。同様に図2にも「貳拾六石余 広島浦」、「百三拾七石余 中喜来村(正しくは浦)」、「九拾六石余 長岸村」の文字が見えます。「矢倉野村・木津野村・備前島村(いずれも現：鳴門市)」が、中喜来浦と長岸村の間に描かれるなど、村浦はおおよその位置で描かれています。

当時の吉野川は、『Our よしのがわ』Vol.57で松下さんが紹介されているように、名西郡第十村(現：石井町)付近から西から東へと蛇行しながら次々と分派して流れ、松茂町域では「広戸口」「今切口」から紀伊水道へと注がれることで、絵図の赤丸部分には広大なラグーンが形成されていることが一目で分かっています。

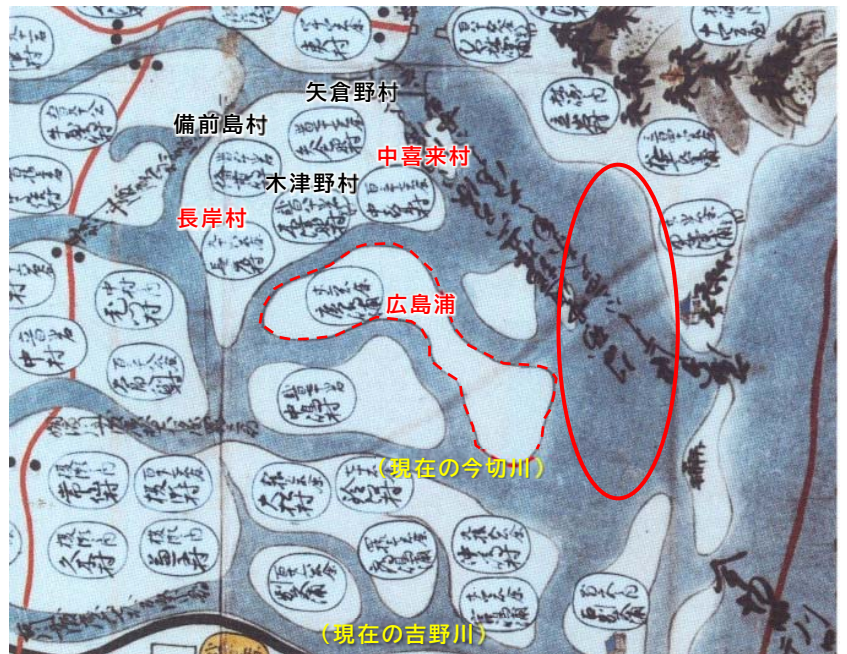


図1 「御両国図(部分)」(国文学研究資料館所蔵、筆者加筆)

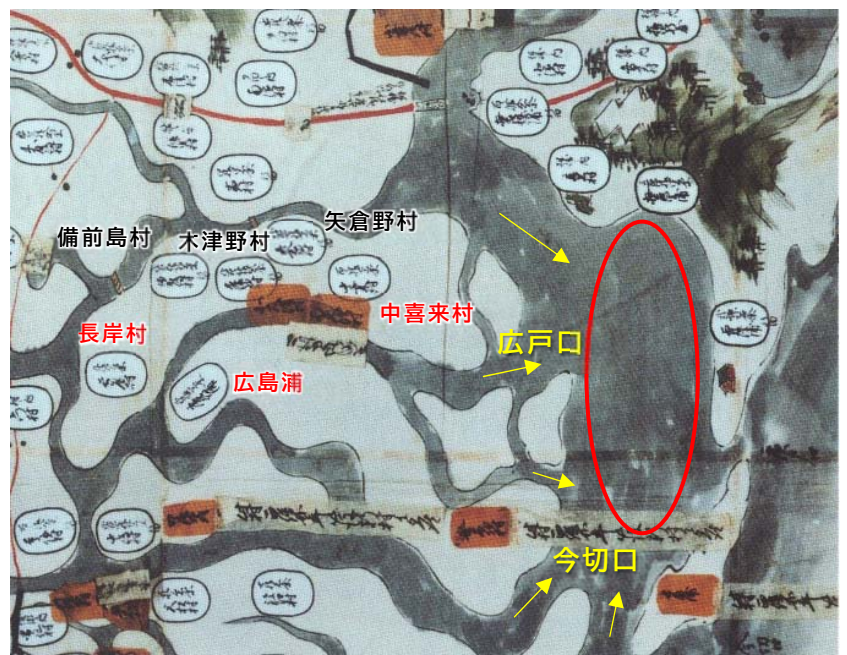


図2 「阿波御国図(部分)」(国文学研究資料館所蔵、筆者加筆)

2. 吉野川河口の新田開発に挑む先人たち

18世紀に作成された図3「笹木野新田絵図」(国文学研究資料館所蔵「蜂須賀家文書」)には、未開の地である萱原(オレンジ色)が描かれ、このうち松茂町域では約300町歩、徳島市川内町域では約100町歩の開発が予定されていました。干潟をよく見てみると所々に石積みの手堤(矢印部分)が築かれているのがわかります。この堤は、天明年間(1781-89)に阿波郡伊沢村(現：阿波市)の伊沢亀三郎と摂津国東成郡千林村(現：大阪府大阪市)の土木家・岡島(千島屋)嘉平次らが、吉野川河口部に広がる干潟約400町歩を床銀(徳島藩への上納金)500両で開発の権利を得て築堤した時代のものと考えられます。

19世紀初頭に作成された図4「笹木野新田用水絵図」は、のちに住吉新田となる土地の様子が描かれています。石垣堤防で開発地を閉めきり、堤防の中央には干潮時に新田内の水を排水する木製の井利(現在の水門)や、夜間に井利を開門するための石灯籠も描かれていることがわかります。

当初は伊沢亀三郎と岡島嘉平次の養子・袋屋作次郎が新田開発を行っていましたが、1784(天明4)年7月の洪水で堤防が全壊したため、袋屋作次郎は「袋屋作治郎築建新田場処」と書かれた場所の開発を放棄し大坂へ帰ったといわれています。「此度出来新田凡百町程」と書かれた新田は、大坂の町人鴻池清助が開発を引き継ぎ「鴻池新田(のちに住吉新田)」として開発が進められ、新田内には4本の用水路が通り鎮守(神社)も建立されていることもわかります。しかし、1792(寛政4)年に「古今無双之出水」とまでいわれる大洪水の被害にあい、財政も行き詰まっていた鴻池清助も開発を断念せざるを得ませんでした。

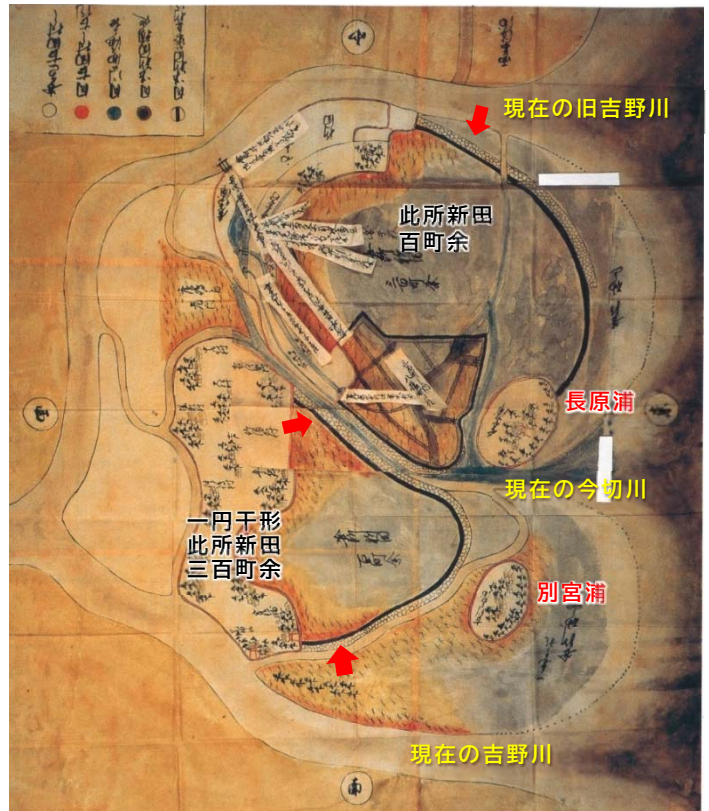


図3 「笹木野新田絵図」
(国文学研究資料館所蔵、筆者加筆)

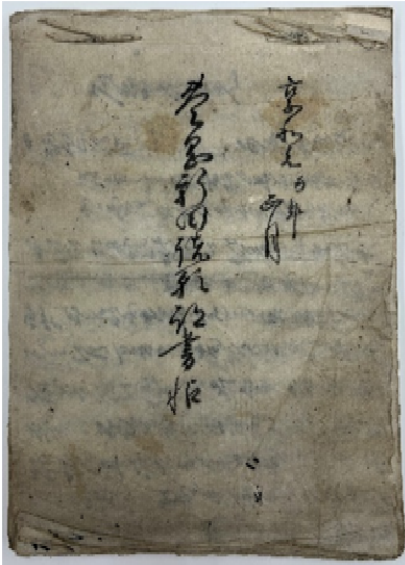


図4 「笹木野新田用水絵図」
(国文学研究資料館所蔵、筆者加筆)

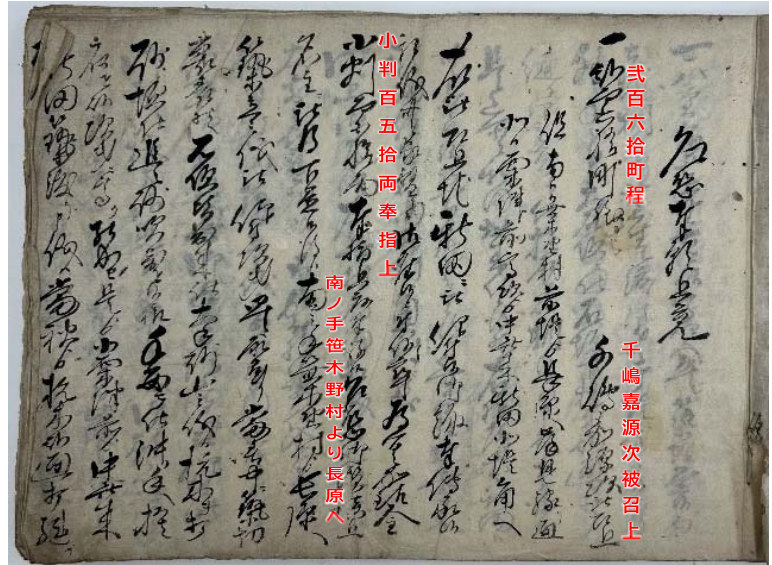
3. 豊岡新田と坂東茂兵衛家

大洪水の被害によって開発者が不在となった住吉新田は徳島藩に接收され、1800（寛政12）年に板野郡宮島浦（現：徳島市川内町）の大藍師・坂東茂八郎に銀72貫目で払い下げられました。坂東茂八郎が住吉新田の名主（地主）になったことをきっかけに、笹木野村や住吉新田の東側に広がるラグーンの開発が大きく進展していきます。

資料1の「^{とよおかしんでんしやねがいあとがきちやう}豊岡新田諸願跡書帳」（資料館所蔵「坂東協二家文書」）は、1801（寛政13）年から1812（文化9年）までの豊岡新田の開発について記されたものです。坂東茂八郎の弟・茂兵衛が行った、今切川から旧吉野川にかけて広がる干潟・^{かやの}萱野約260町歩の大規模新田開発事業の詳細を知ることができます。



資料1「豊岡新田諸願跡書帳」
（松茂町歴史民俗資料館所蔵）



資料2「豊岡新田の開発に関する願書」

坂東茂兵衛が1801（寛政13）年正月に徳島藩御蔵所へ提出した豊岡新田の開発願書（資料2）には、次のように記されています。

「千島嘉源次が徳島藩へ召し上げられた干潟・萱野約260町歩について^{みやうがきん}冥加金（雑税のひとつ）150両を上納いたしますので、新田名主（地主）になることを許可していただけたならば、南側の笹木野村から長原浦にかけての築堤工事に早々に取りかかります…」

また、坂東茂兵衛は開発する新田の名を「豊岡新田」とすることを願い出るとともに、四方の築堤工事の計画と工法についても記しています。

- 東：砂山に杭木を打ち連ねて砂垣の自然堤防ができるようにした後、沖の方へ捨て石をする
- 西：笹木野村、住吉新田、^{しんでんきらい}新田喜来（現：松茂町中喜来字福有）がある
- 南：春までに笹木野村から長原浦にかけて石垣の堤防を築きあげる
- 北：秋頃から杭木を打ち連ねて4尺程（約1.2m）の土手を築いた後、石垣や捨て石をする

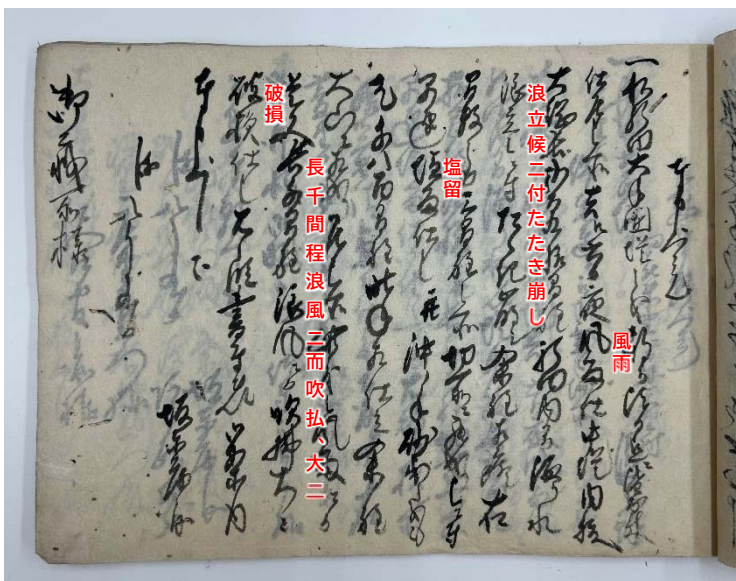
坂東茂兵衛の申し出に対して、徳島藩は兄・茂八郎が所持する住吉新田の添地であることに加え、広大な新田が完成した際には年貢増収なども見込めることを吟味した結果、1801（享和元）年4月18日に下知を下しています。さらに、7月24日には徳島藩御蔵所から正式に豊岡新田の開発許可が下りたことが下札（許可書）の写しから知ることができます。大規模新田開発事業に乗り出した坂東茂兵衛ですが、土木に関する知識などに乏しかったため、新田開発の裁判人（現場監督）として長江新田（現：鳴門市）の開発実績がある長岸村の阿部政次郎を迎え入れました。

新田の本格的な工事は当初の計画からずれ込み9月から始められ、南（今切川）の大手堤の普請が行われました。9月22日に御蔵所へ提出した願書によれば、南北の大手堤にはツガ材を使用した長さ7間（約12.7m）、内法幅5尺（約1.5m）、高さ3尺5寸（約1.3m）、厚さ2寸5歩（約9.5cm）の井利を3カ所に設置する予定であったことがわかります。

しかし、紀伊水道や吉野川に囲まれた過酷な環境での新田開発は困難を極めたことはいうまでもありません。10月27日の願書では御蔵所に対して、吉野川の水流が激しいため工事が困難であることを次のように記しています。

豊岡新田の築堤普請は、9月29日から南手の工事に取りかかりましたが、水の勢いが早く工事が極めて困難な場所です。当月20日から21日夜8ツ時（午前2時）まで大人数で昼夜とも働き、一気に築き留め申しますので、ご案内申し上げます。

また、翌年8月9日の文書（資料3）では、台風による堤防の決壊や砂山の崩壊について報告しています。加えて、同日に提出された他の文書では、中堤が決壊したことに加え、新田内に海水が流れ込んだため塩留をするために向喜来（現：松茂町中喜来）から萱野土を下し置かれたい旨を、徳島藩萱野方へ願い出ています。



資料3 台風による被害を報告した文書

大手囲い堤は、先日までできあがりでしたが、6日夜の風雨により、新田内の水が波立ち中堤を打ち崩しました。

また、昨年までに東の砂山も1800間程（約3.2km）に渡る大山をつくりましたが、雨風によって1000間程（約1.8km）が波風によって吹き飛ばし損害がでたことをご案内申し上げます。

坂東茂兵衛は、1813（文化10）年に病没する前年まで「豊岡新田諸願跡書帳」に新田経営の様子や資材や用水の確保、有付百姓（入植者）問題などを詳細に書き残しています。先に紹介した風水害以降も、少なくとも5回は自然災害が原因で堤防の決壊や井利の破損などの被害を受けていることがわかります。

最後に紹介する絵図（図5・6）は、1815年（文化12年）2月に徳島藩が実測に基づいて作製した「板野郡分間郡図」（三木文庫所蔵）です。当時の板野郡を縮尺18,000分の1で描いた絵図には、吉野川河口の新田開発の様子を詳細に知ることができます。

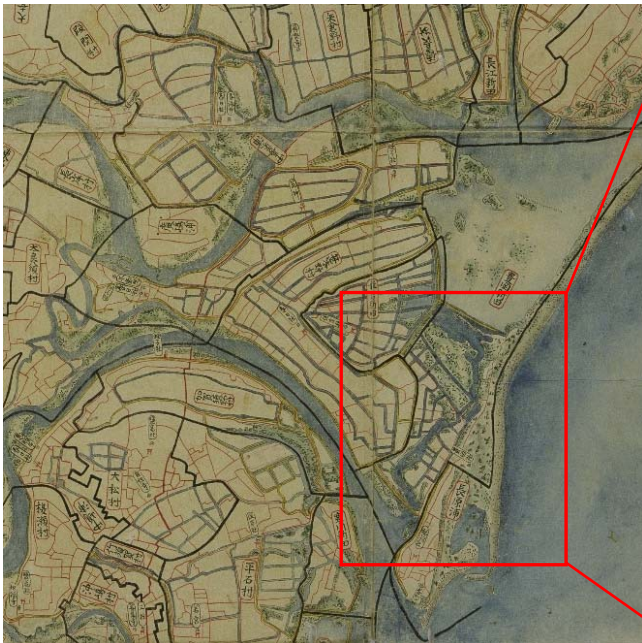


図5 「板野郡分間郡図（部分）」
（三木文庫所蔵、筆者加筆）



図6 「板野郡分間郡図（豊岡新田部分拡大）」
（三木文庫所蔵、筆者加筆）

豊岡新田部分に注目してみると、今切川沿いの南大手堤と干潟中央部に中堤が黄色の線（矢印部分）で描かれていることがわかります。堤の中は南側の一部に田畑（白色）が開発されていますが、他の大部分にはいまだに萱野や干潟が広がっていることが見て取れます。紀伊水道に面する豊岡新田は、開発当初から塩地や荒地が多く稲作が十分に行えない土地であり、1803（享和3）年10月に徳島藩への初穂米2石を献上していますが、そのほとんどが粗悪米でありました。一方で、畠作については砂山で琉球芋や西瓜の栽培が行われ、西瓜については徳島藩へ献上していた記録もみることができます。

坂東茂兵衛が開発許可を得てから46年後の1847（弘化4）年11月に鍬下年季（一定の期間租税を免除や軽減すること）が明けて最初の検地を受けました。1833（天保4）年に反別22町1反余り、御積米（収穫予定米）25石余りであった田畠が、1847（弘化4）年の検地の時には反別46町5反余り、高169石余りに増加するなど、着々と新田開発が継続されていきました。なお、坂東茂兵衛の没後の新田経営は、娘婿の喜右衛門、孫の坂東黙之丞（のち豊岡蒔塙）へと引き継がれていきました。

豊岡荔墩は、『Our よしのがわ』Vol. 21 にも紹介されていますが、明治維新後に吉野川の利水に関する政策的な提言を行った人物です。1874（明治7年）に西野友保^{みょうどう とも}名東^{なとう}権参事^{こんさんじ}へ建白した「疏鑿^{そさく}迂言^{うげん}」では、灌漑^{かんがい}と舟運は元来性格の異なるものであり併用すべきではないと説くと共に、吉野川北岸における大規模な農業用水路の構想を提言しました。この構想は壮大であり実現こそしませんでした。吉野川北岸地域の人々の意見を汲んだ提言であるところが評価できるのではないのでしょうか。また、その後も農業用水路建設への熱意は継承され長い歳月を経て、農業用水路が整備されていくこととなりますがこれはまた改めてお話ししたいと思います。

おわりに

この後、豊岡新田は南側にあたる110町歩の開発に成功しましたが、残る北側150町歩の開発権は徳島城下^{しん}新町の阿部豊吉と名東郡^{なとうぐん}早淵村の後藤善右衛門に譲渡され、豊久新田と満穂新田として開発されていきました。新田開発当時の風景は見る影もありませんが、唯一残っているのが写真3の遊水池です。

吉野川河口部の新田開発は、いわゆる「町人^{ちやうにん}請負新田^{うけおいしんでん}」といわれる種類のものであり、先人たちは風水害とたたかいながらも地主的土地所有を夢見て新田開発に取り組みました。

現在では、当時の面影を残している場所はほとんどありませんが、地域に遺る石碑や古文書などの文化財から、地域の歴史や先人たちの労苦を知っていただければ幸いです。



写真3 当時の名残である遊水池
(H29 撮影)

松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館ウェブサイト

URL <https://joruri.jp/>

Our よしのがわ Vol.53「コウノトリ・ツルでつながる阿波の国」では、松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館を紹介しています。

また、「吉野川歴史探訪」のバックナンバーも「Our よしのがわ」のウェブサイトで公開しています。本号掲載記事と合わせて引き続きお楽しみください。

Our よしのがわ「吉野川歴史探訪」バックナンバーウェブサイト

